

シンポジウム

難民が開く日本社会

— インドシナ難民の受け入れから 40 年を経て —

2019 年 11 月 9 日 (土) 13:00 ~ 18:00
上智大学四谷キャンパス 2 号館 401 室

1970 年代、日本は戦後初めての本格的な難民受け入れ政策として
ベトナム・ラオス・カンボジアのインドシナ三国からの難民を受け入れました。
昨今、日本では外国人労働者問題に注目が集まるなか、第三国定住政策が
拡大されるなど難民受け入れも大きく変わろうとしています。
日本で唯一の難民受け入れの先行事例であるインドシナ難民受け入れの
40 年をふりかえり、多様化・国際化する日本社会を考えます。

プログラム

総合司会 蘭 信三 (上智大学大学院国際関係論専攻 教授)

- 第 1 部 日本におけるインドシナ難民研究の射程 (13:10 ~ 14:15)**
「戦後日本とインドシナ難民受け入れの意義」 人見泰弘 (武蔵大学准教授)
「冷戦人道主義の逆説」 佐原彩子 (大月短期大学准教授)
「インドシナ難民の受け入れが現在の日本に問いかけること ~ 官民双方の分析から」
長 有紀枝 (立教大学教授・AAR 理事長)
- 第 2 部 日本のインドシナ難民支援の展開 (14:30 ~ 16:20)**
「ベトナム終戦と日本」 吹浦忠正 (さぽうと 21 理事長・元国際赤十字インドシナ駐在代表)
「難民を助ける会から見る難民支援の 40 年」 柳瀬房子 (AAR 会長)
「インドシナ難民定住受け入れの現場から」
寺本信生 (元難民事業本部・元定住支援センター施設長)
「難民支援協会からみた難民支援の 20 年 ~ 2000 年代以降の視点から」
石川えり (難民支援協会代表理事)
- 第 3 部 当事者・関係者からみた 40 年—インドシナ難民当事者・関係者による座談会 (16:35 ~ 17:50)**
ラオス：チャンタソン・インタヴォン (ASPB ラオスの子どもに絵本を送る会 代表)
ベトナム：グエン・タット・トルン (ベトナム難民 2 世・JAXA、研究開発部門センサ研究グループ)
カンボジア：ユ・エン・ワンティ (カンボジア難民、(株) 虎屋 勤務)

【お申し込み・お問い合わせ】 シンポジウム事務局：info.indochina2019@gmail.com

【主催】 上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科国際関係論専攻

【共催】 三菱財団研究助成「日本型難民社会統合政策の構築に向けた総合的調査研究」

【協力】 認定 NPO 法人難民を助ける会 社会福祉法人さぽうと 21 インドシナ難民研究会